

劇団うりんこ紹介

- 1973 劇団うりんこ創立
- 1980 名古屋市芸術奨励賞 受賞
- 1986 うりんこ劇場(猪子石創造文化会館)オープン
- 1991 ドイツのゲッティンゲン劇場と合作「ロビンソンとクルーソー」(作=N・ディントローナ+G・ラッヴィキョ/
演出=P・ハタージー) 国際交流が始まる
- 1993 平成4年度愛知県芸術文化選奨 受賞
- 1994 ドイツより演出家を招聘「マックスとミリー」(作=フォルカー・ルートヴィヒ/演出=ヴォルフガング・
コルネーダー)
厚生省中央福祉審議会(中学生)特別推薦「フタをあければ夏のかぜ」児童福祉文化財に指定
- 1995 (社)日本劇団協議会入会
日本児童・青少年演劇団協議会より「未来賞」受賞
- 1996 東京都優秀児童演劇選定優秀賞・斎田喬戯曲賞「あした天気になあれ!」受賞
- 1999 (社)日本児童演劇協会賞 受賞
- 2001-03 劇団うりんこが「アーツプラン21文化庁芸術団体重点支援事業」に採択される
- 2003 創立30周年記念公演 日・豪合作「ムーン・プレイ」(作=ジリアン・ルビンスタイン/演出=ピーター・
ワイルソン)
- 2006 厚生労働省児童福祉文化賞「だってだってのおばあさん」受賞
- 2010 厚生労働省社会保障審議会推薦「Dial A Ghost—幽霊派遣会社—」が児童福祉文化財に指定
スウェーデンより演出家を招聘「ねむるまち」(脚本・演出=バート・フーグランド)
- 2011 (公財)名古屋市文化振興事業団 第27回芸術創造賞 受賞
- 2012 厚生労働省児童福祉文化賞「ほくってヒーロー?」受賞
- 2013 厚生労働省児童福祉文化賞「ねむるまち」受賞
劇団うりんこ創立40周年記念公演「罪と罰」(脚色・演出=山崎清介)

劇団うりんこの青少年向き作品一覧

- 1975 「グスコープドリの伝記」(脚本=広渡常敏/演出=木崎裕次+しかたしん)
- 1982 「ブツダ」(原作=手塚治虫/脚本・演出=小田健也/音楽=宇野誠一郎)
- 1985 「おっちょこちよ医」(原作=なだいなだ/脚色・演出=ふじたあさや/音楽=宇野誠一郎)
- 1988 「黄色い扉—あゝのころはフリードリヒがいた」(原作=H・P・リヒター/脚色・演出=ふじたあさや/音楽=
宇野誠一郎)
- 1991 「いつも靴にパラダイス—会いたくなる風景がある」(原作=P・ヘルトリング/脚本・演出=加藤直/音楽=
青島広志)
- 1993 「フタをあければ夏のかぜ」(作・演出=高瀬久男/音楽=福島一幸)
- 1996 「ほらふき金さん—幕末青春伝」(原作=阪田寛夫/脚色・演出=ふじたあさや/音楽=佐藤容子)
- 1999 「老人が来た—止まった時間」(作=関 功/演出=玉野井直樹/音楽=川本哲)
- 2001 「ディアノーバディ」(原作=B・ドハティ/脚色=平石耕一/演出=松本祐子/音楽=川本哲)
- 2003 「シェイクスピアを盗め!」(原作=G・ブラックウッド/脚本・演出=山崎清介)
- 2004 「弟の戦争」(原作=ロバート・ウェストール/脚色・演出=鐘下辰男)
- 2008 「Dial A Ghost—幽霊派遣会社—」(原作=エヴァ・イボットソン/脚本・演出=山崎清介)
- 2013 「罪と罰」(原作=ドストエフスキー/脚色・演出=山崎清介)
- 2017 「ドン・キホーテ」(原作=セルバンテス/脚本・演出=山崎清介)
- 2020 「クローゼットQ」(脚本・演出=田辺剛)

劇団うりんこは1973年、プロ劇団として創立。うりんことは「イノシシの子ども」のこと。猪のように子どもたちのところへ真っ直ぐ走りたいという願いを込めて付けられました。以来、愛知、岐阜、三重の学校を中心に巡回公演を続け、今では活動は全国、海外に及びます。1986年には「うりんこ劇場」をオープン。子どもたちが自らの力で自らの未来を創っていく「糧」になるような演劇を創りたいと活動を続けています。



〒465-0018 名古屋市名東区八前一丁目112番地
TEL.052-772-1882
FAX.052-771-7868 www.urinko.jp info@urinko.jp

世にも奇妙な
旅のはじまり

クローゼットQ

「クローゼットQ」

脚本・演出=田辺剛(下鴨車窓)

美術=乗峯雅寛(文学座)/音響・音楽=ノノヤママナコ/照明=御原祥子/衣装=さくま晶子
宣伝美術デザイン=伊藤祐基/写真=服部義安/映像=山内崇裕



INTRODUCTION

青少年のみなさまへ

進路や学校生活などに悩んだ時、人生の先輩たちは見聞を広げて
様々な体験をするようアドバイスしてくれます。

「初めて見るもの、価値観の異なる人に出会う事が大切！」

でも現実の毎日は、家と学校との行きかえり・・・

さあ！自分の部屋ごと漂流する事になってしまった

このお芝居の主人公と一緒に奇妙な旅に出かけませんか？

人生は行き先の決まっていない旅のようなもの。

貴方の旅は今日始まるのかもしれない。

生きること、働くこと、

大人になることを知るために

高橋ユウキ

高校2年生。ギター、野球、何をやっても
長続きしないタイプ。

イジメられたり孤立している訳でもない
のに毎日が面白くない。最近バスケ部
を退部し、学校を休む日が増えている。

Yuuki



Rena

フリーター。元陸上部だが、走る事が好き
な訳でもない。将来就きたい職業に
ついては何となく「やりがい大切」と
感じている。「誰にでも出来る簡単
なお仕事」というフレーズに惹かれ、深く
考えずにバイトの面接を受ける。

新井レナ

高校生の〈ユウキ〉は、自宅の庭に祖父が建てた物置に
半ば引きこもっている。
部活は辞めた。進路は見えない。
高床に作られている物置には、電気も家具もある。
通販サイトでポチつとすれば、宅配も届く。
雨が強く降るある夜、近所には避難警報も出ていたが
ユウキはずっと物置にいた。
夜が明けると、周囲は一変していた。
物置ごと見知らぬ場所に移動したようだ。
ユウキが住む物置は、無人島や戦場をさまよい旅をする。
フリーターの〈レナ〉は、とある仕事に採用される。
「ただ押すだけ。誰でもできる簡単な仕事」だ。
部屋のような大きな何かを、ひたすら押す、
行先はわからない。
レナもまた、あらゆる場所を転々と旅をする。
上の世界のユウキ、下の世界のレナ。
見ず知らずの二人の世界が関わり合い、
やがて二人はそれぞれの一步を踏み出した。

ものがたり
STORY

YUUKI'S STORY

ユウキの視点

天気悪くなるって
嵐だってよ。

どこだ……よく見えない。
ドッキリかな、あそこかドッキリか。



手紙？

お前宛じゃないぞ。

分かってる？
ここアマゾン米ないんだよ。ウーバーも。
分かってるよ。

二人の迷子が



最高だろ
誰にも邪魔されずに
好きなことができる。

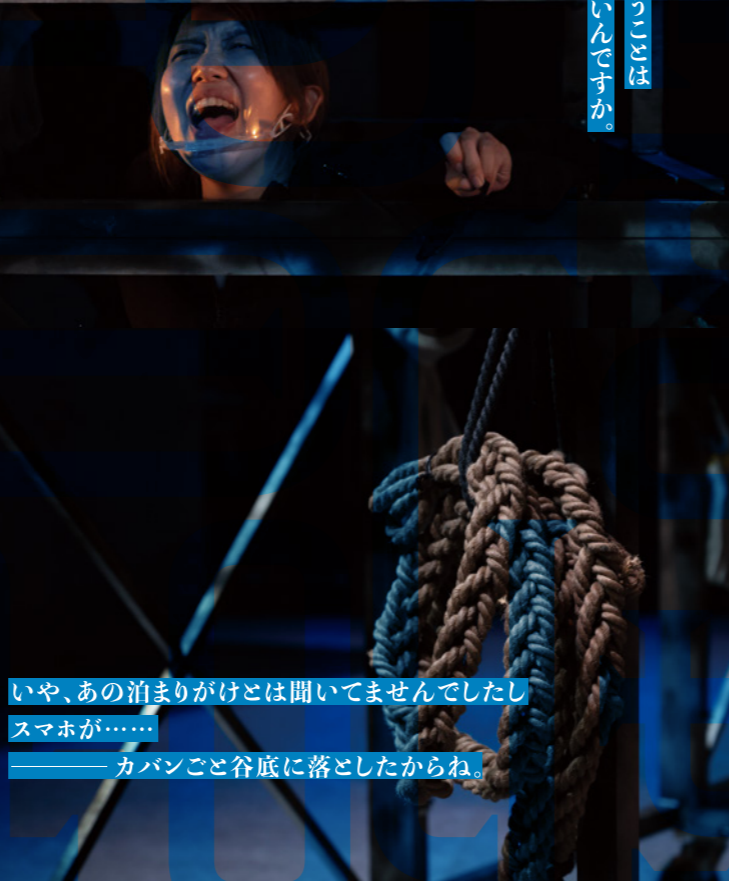
「誰でもできる簡単なお仕事です」ってね
嘘じゃないでしょ。難しくもない。
押すだけなんだからこれ。

これ、え、っていうことは
明日も帰れないんですか。

自分の仕事について考えない、
疑問を持たない、言われたとおりにする。
これがもっとも大切なことです。

どこに行くのかも
告げられない……

何の仕事か、



いや、あの泊まりがけとは聞いてませんでしたし
スマホが……
カバンごと谷底に落としたからね。

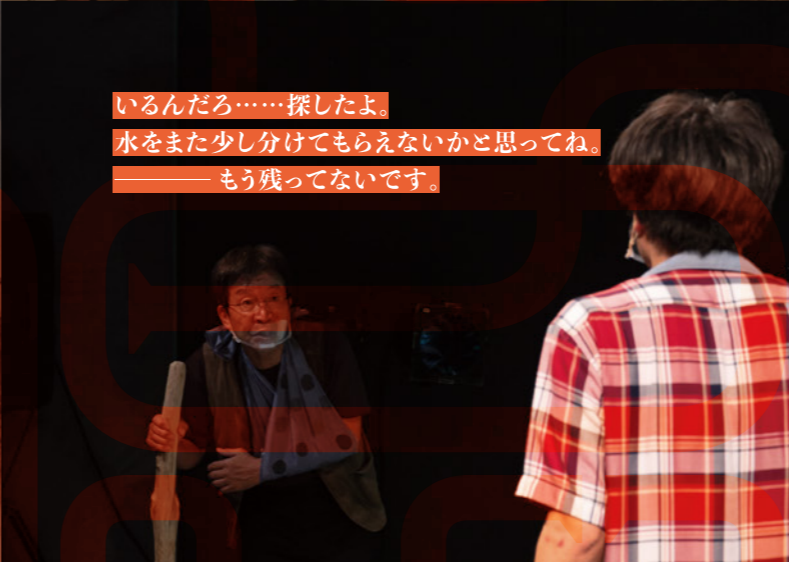
ふざけんよ。
俺はいつものどこに帰りたい。



この部屋、爆弾大丈夫？
大丈夫なわけないだろ。

嵐の夜、小屋は
漂流を始めた。
無人島へ、戦場へ……そして

いるんだろ……探したよ。
水をもう少し分けてもらえないかと思ってね。
もう残ってないです。



部屋にいれば戻れると思うんですけど、
どうしてこんなところに来たのかは
分かりませんが、
だから戻り方もさうですけど

下が見えない、
真っ暗な海を漂ってるみたい

たどり着いた世界は

気をつけてよ
爆弾落ちてくるから。



このカラダを会社に
レンタルするみたいなものだ。
その引き換えにお金をもらう。

世の中のほとんどの仕事は
たいして意味もなくコツコツやるしかないんだよ。
そんなことない。
仕事に生きがい感じたりってあるじゃないですか。

場所の感覚もなくなり
時間も分からなくなり
風の夜をひたすらに……

いまはお母さんの肉じゃがが、
溺れるくらいに食べたいです。



レナの視点

RENA'S STORY

MESSAGE

メッセージ [脚本・演出 田辺剛]



高校生の時でした。初めて乗った夜行の高速バスでは消灯時間を過ぎても眠れるはずがなく、カーテンを少し開いて外を見ます。高速道路の向こうに光る街はどこか分からないまま後ろに流れていきますが、驚いたのは次々にすれ違っていく大型トラックです。真夜中に、いつもはわたしがベッドで深い眠りにいる頃に彼らは走っている。血液がからだのなかを巡るように、さまざまな地域のあいだを多くのトラックが行き交いモノを運んでいる。眠っているときには気づきようのないことです。幸いだったと思っています。その夜行バスで眠れずにいたわたしはそのカーテンの隙間に絶えず動き続ける世界を目の当たりにしたのです。

見えるところまで、聞こえるところまでが自分にとっての世界のすべてだとわたしたちは思い込みがちです。その先にも世界は広がっているのですが、それは頭ではよく分かっているのですが、日々の生活に追われていると見えないところに目をこらし、聞こえないものに耳をすます余裕はなくなります。また、例えば町ですれ違う見ず知らずの人が、実は昨日わたしが食べたコンビニのおにぎりを作った人かもしれない。

例えばそのコンビニでおにぎりをわたしに手渡した店員は、今日には海外に飛び立っているかもしれない。さまざまな「かもしれない」を考えている暇もわたしたちにはありません。けれどもそうした余計なことを省いた結果、知らず知らずのうちに自分の世界は狭くなって、価値観やモノの考え方も窮屈になっていきます。

演劇を観るということは、普段は見えないもの聞こえないものに向かい合う機会です。「かもしれない」想像を自由に巡らせることが許される時間です。そして『クローゼットQ』は旅の物語。窓越しに見える世界とさまざまな人との出会いによって登場人物たちの当たり前が見つめ直されます。自分が知らないところでも人は生きていて、世界は動き続けている。名前も知らない誰かの存在が今日を生きるわたしを支えているということ。

あのときカーテンを開けることなく眠っていれば気づくことはなかった世界の「ほんとう」。ちょっとした好奇心が自分の世界を広げてくれることがあります。『クローゼットQ』がご覧いただく皆さんのいつもどおりの世界を刺激できれば幸いです。



舞台全景

STAGE SET